

修士論文要旨

看護学研究科 博士前期課程	学籍番号 M21302 氏名 五十畑 麻奈美
論文題目	分娩介助が助産師の気分状態に及ぼす影響
<p>【目的】 本研究の目的は、分娩介助を担当した助産師の勤務前後における気分状態を評価し、勤務中の分娩介助が助産師の気分状態に及ぼす影響を検討することである。</p> <p>【対象と方法】 A 県内の分娩取扱施設に勤務し、分娩介助業務に従事する助産師 280 名を対象に、自記式質問紙調査を行った。気分状態は、日本語版 Profile of Mood States 2nd Edition 成人用短縮版（以下 POMS2）を用いて評価した。勤務開始時と勤務終了時に POMS2 を実施し、勤務中の分娩介助の有無により「分娩あり群」と「分娩なし群」に分けて検討した。また、「分娩あり群」の助産師の気分状態に影響を与える要因を検討するため、医師介入の有無、助産師経験年数、勤務助産師数に関して比較検討した。勤務前および勤務後の POMS2 の評価点の比較は Wilcoxon 符号付順位検定を用いた。</p> <p>【結果と考察】 研究協力者は 72 名(回収率 28.2%)であり、全回答を分析対象とした(有効回答率 100%)。「分娩あり群」は勤務前後において【TMD】【混乱-当惑】【疲労-無気力】の評価点が有意に上昇しており、勤務後は総合的にネガティブな気分状態になっていた。「分娩なし群」では下位尺度の【緊張-不安】が勤務後に有意に下降したことから、分娩を介助しなくても勤務中は緊張・不安という気分状態にあったと推察された。</p> <p>「分娩あり群」のうち「医師介入あり群」において【TMD】【混乱-当惑】【疲労-無気力】が有意に上昇する一方、【活気-活力】が有意に下降した。医師の介入を要する分娩とは、経過中に何らかのトラブルが発生し母児の双方あるいはどちらかに危険が迫っている状況であり、助産師はその対応に関して精神的に混乱し活力が低下し、総合的にネガティブな気分状態になっていたと考えられる。医師の待機形態も助産師の気分状態に影響を与えていた。自宅待機の場合は、勤務後に【緊張-不安】が和らいでおり、緊急時に医師がすぐに分娩室に来ることができないという点で勤務中の緊張感と不安感が強かったものと考えられる。助産師経験年数や勤務助産師数に関しては、下位尺度の【疲労-無気力】が有意に上昇しているのみであり、分娩介助を担当する助産師の気分状態へ大きな影響を与えていなかった。</p> <p>助産師の気分状態がネガティブに傾くことを予防するには、①医師との良好な関係性の構築と②助産師個人のストレスマネジメント及び組織的なストレスマネジメントが重要であることが示された。</p> <p>【結論】 分娩介助は、助産師の総合的な気分状態にネガティブな影響を与える業務である。気分状態がネガティブに傾くことを防止するには、医師との良好な関係と助産師のストレスマネジメントが重要である。</p> <p>キーワード：分娩介助, 気分状態, 助産師, POMS2</p>	